AMU ニュースレター

【AMU　PLAZA】　No.45号　令和4年2月

●ジョナサン　ボーデン画●

前回のニュースレターから季節が廻り、年が明け、そろそろ来年度の予定なども入ってくる時期になりました。アムプラザ開設から 8ヶ月、まだいらしたことがない方、ふらっと覗いてみてください。
ここの窓から見える旧庁舎が少しずつ姿 を消していきます。大規模な解体はさながら映像のよう。夕暮れ時には、空がいっときグレイからあっという間に藍色のグラデーションに広がります。冬から春へ、景色の移りかわりはしばしの間コロナの終息後を思い巡らせてくれるようです。

【AMU　PLAZA】では、週2回 「にほんごアムアム」 を開催しています。

AMU　PLAZA

日本語で話してみたい外国籍の方と、彼らと話したい方が出会う場所です。
日本語で会話チャレンジしたい方にとっては教室で、彼らと話したい方にとっては異文化交流の場でもあります。興味のある方はまず見学からどうぞ。また、日本語学習の場としても利用できますのでご希望の方は事前にお問い合わせ下さい。 学齢期のこどもが学ぶ場、もうひとつの「にほんごアムアム」は次年度より始まります。

●●● さて、AMU活動です。ここ半年ほど学生たちの課題研究サポート・調査、地元公民館、団体などからの講義依頼が中心となりました。それぞれの参加者が学生（個人）、市民団体、自治会対象に限られていたので、会員の皆さんにはこのニュースレターで内容をお伝えすることになります。
こういった活動が続くのもコロナ禍である所以…皆さんといっしょに活動できる日が待ち遠しいですね。

◆長野大学インターンシップ受け入れ　8/17 ～9/15

上田市の多文化共生に係る関係部署の協力を得て、長野大学社会福祉学部より 3年生1名を 9 日間にわたり受け入れました。インターンシップ訪問先は次の通りです。

- ・人権男女共生課　多言語相談ワンストップセンター
- ・プラザゆう　男女共同参画について
- ・上田高校フィールドワーク　オンライン参加
- ・市政の中の多文化共生講義・市長面談（半田議員）
- ・地域雇用推進課　外国人の雇用
- ・上田第一中学校　日本語教室

アムプラザではミーティング、にほんごアムアム参加などを行いました。技能実習生へのインタビューはコロナ感染警戒レベルにより中止となりましたが、その他はスケジュールを変更しつつ実施しました。

ジョナサン　ボーデン画

学生より各受け入れ先の報告後、それぞれの場所において、外国籍市民の持つ能力を発揮してもらうにはどうしたらよいか話し合いました。共通するのは日本語の習得が最初のハードルであり、その過程で異文化に対する周囲の理解も必要だということです。どちらも決して外国籍市民のみで達成できる問題ではなく、自分も含め、市全体で包括していく過程の一部であると考えると、地域で必要なことが少しずつ見えてきます。ひとりひとりができる事は、彼らに目を向けていくこと，対話を重ねること。共生社会に向けた道のりはこれからも続いていきます。

後日、長野大学においてインターンシップ体験者のオンライン報告会が開催されました。担当した学生の発表から、各プログラムの内容をしっかり受け止めてくれたことが伝わり、大変嬉しく思いました。

◆上田高校1学年　フィールドワーク　　オンライン　9/15　　◆アカデミックプレゼンテーション　上田高校　10/9

昨年に引き続き上田高校1学年（今年度は 1年6組）のフィールドワーク受け入れを担当しました。AMU から学生たちに研究課題を出し、それらについて学生たちがグループで研究し、成果を発表してもらい、講評を担当するものです。今回は課題に学生たちが自ら外国籍市民へのインタビューに出向く内容を含めました。

課題 その1　多文化共生社会（文化が異なる人同士が共に生きる社会）ではひとりひとりの市民（私）として何が必要か。

課題 その2　上田に暮らす外国籍市民の抱える問題にはどのようなものがあるか。（自分が海外で暮らすと考えた時、何が課題となりそうか）
＊インタビューを通して考える。

研究は4チームに分かれて行われました。学生たちは外国籍市民の抱える課題について仮設を立て、思い切って留学生へのインタビューに挑んだところ、行先で皆さん快く応じてくれたそうです。コロナ禍で調査対象は留学生に限られたものの、彼らの生の声から外国人の人権問題、日本語教育の重要性が浮かび上がり考察へと繋がりました。

講話は理事の金久美さんより、自らのルーツ「在日コリアン」について、日本人の外国籍市民への一方的な思い込み、マジョリテイ中心の制度などのお話がありました。

10月9日（土）には同校で**アカデミックプレゼンテーション**が開催され、2グループと 1名の自主的な研究活動の発表が行われました。内容は1. 民話と演劇（海外の民話と日本の民話から普遍的な人間関係の営み発見等）
2. 日本語教室「希望」での学習支援活動、 3. 外国籍市民を支援するアプリ開発、です。
AMU は「希望」、と、アプリ開発のアンケート調査に関わっており招待して頂きました。近年、高校生の中で外国籍市民に関する支援や研究が増え、その意欲とレベルの高さにも目を見張るものがあります。

◆異文化理解講演会 「今、ミャンマーを知る」　　上田市役所会議室　11/6

ミャンマー出身の荻野茶々さん、弁護士の渡邉彰悟さんのお二人の講演を市役所3階会議室よりオンライン、2階会議室においてスクリーンによる視聴で開催しました。

第 1 部の講師、茶々さんはカチン州カチン族出身です。クーデターで変わりゆく祖国の様子を映像と共に伝え、日本の支援を訴えました。「国軍によって次々に法が変えられてしまう」、「故郷の工場を何とか再び稼働させてほしい」「子どもが無差別に撃たれている」 家族とは連絡を取ることが出来ないそうです。

第2部の講師、渡邉弁護士は 30年間にわたりミャンマー人の支援に携わり、日本での難民認定についても精力的に活動されている方です。 茶々さんが伝えた状況から、日本の中のミャンマー人・難民について、そして日本のミャンマーへの向き合い方をわかりやすくお話頂きました。

【事実に目を向けることの意味】

クーデターは勃発から 1年、多くの市民は国軍への抗議を継続し、今だ沈静化する気配が見えません。ミャンマー国内は複雑に絡み合う各国の駆け引きと利害関係がからみ混沌としたままです。茶々さんによると、市民は民主主義獲得のために犠牲になることを厭わなくなっているなど、今後の行方が非常に懸念されます。

「難民・外国人問題はその社会の人権状況を映し出している」渡邉弁護士

◆夜間中学視察報告会　12/3　パレオビル2階

AMU の半田アドバイザーより夜間中学校3校の視察報告を行って頂きました。
夜間中学は義務教育を修了出来なかった 16歳以上の人のために開校され、
そこで学ぶ生徒には日本で義務教育を修了出来なかった外国籍市民も含まれます。
2016年の教育機会確保法成立以降、夜間中学校の設置は 12都道府県、36校と進みました。その一方、学びたい人のニーズや運営、カリキュラム、そこで学ぶ生徒たちについてはまだよく知られていません。上田市では、まずそれらの実態を知ってもらうことを目的に開催しました。各校の報告より、夜間中学の設置には、熱く取り組む人々の思いなしに実現出来なかった様子が伝わってきました。

大阪府	茨城県	埼玉県
岸和田市立岸城中学校夜間学校	常総市立水海道中学校夜間学級	川口市立芝西中学校陽春分校
生徒数 58 名　多国籍（シリア、スーダン）含む西アジアの生徒が多い。昭和28年岸城中学校補導学級として発足	生徒数 18 名　2020年4月開校「常総市ふるさとアドバイザー」1名の提言により開校にこぎ着ける	生徒数 60 名　2019年4月開校川口市自主夜間学校、他有志が 30年以上にわたり開設を要望しようやく実現

AMU では令和3年12月15日に芝西中学校陽春分校の視察を行いました。そこで学ぶ生徒の年齢は 10代から 80代まで、すべての年代に渡っています。国籍も年齢も異なる生徒同士がペアになり、教えあっている姿 が印象的でした。在籍生徒数のうち外国籍は 7割で、彼らは 1年間の集中日本語指導を受けた後、教科学習に入るそうです。

◆シニア大学　12/8　合同庁舎　大会議室　長野県シニア大学より、外国籍講師による講義の依頼を受け、

理事のマーメット　ショーンさんが「カナダの教育システム」と「異なる文化のなかで生きる」について、約90分間の講義を行いました。 シニア大学は 2週間ごとに異なるジャンルから講師を招いて学んでおり、外国籍の講師は初めてだそうです。今回の講義は多文化共生社会の一例としてカナダの教育システムと、異文化の中で暮らすスキルなどについてお話がありました。

外国籍講師のお話は主に日本人に対して伝えたいこと（主観による）、自ら経験した文化の違いなどを話すことが多く、その場合、参加者の感想も講師個人に向けたものが多いのですが、シニア大学ではおもに講義の内容についての意見・感想がみられました。

カナダは移民の国

【サードスペース　メンタリティー】
相手が賛成できない行為をした時
■一歩おいてより幅の広い視野で
それらを判断できる能力
■判断を先に延ばすことができる

◆城南地区「人権を考えるつどい」　12/8　城南公民館　大ホール　スリランカ出身のレガン・デ・シルバ

さんに、外国人という立場で日本に暮らすことについてお話いただきました。レガンさんは 2008年に来日されてから 13年、この間にスリランカ出身のナオダさんと結婚し、子どもが生まれ、企業の正社員に昇格し、昨年は新築の家を購入と、次々に夢を叶えていった方です。 日本語は非常に堪能ですが、職場を通じ独学で覚えたそうです。

ここまで来れたのは一人の日本人の献身的な支えがあったからだと話してくれました。その方は、レガンさんとその仲間がリーマンショックで失業後に、アパートの家賃を肩代わりしてくれた上、食事も調達し、励ましてくれたそうです。そのおかげで今があると繰り返し感謝していました。

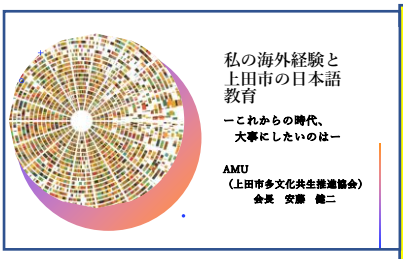
「新しく上田に来た外国人には、ゴミ出しなどのルールを丁寧に教えてあげて下さい。そうすればみんなそのとおりにやりますよ、外国人という先入感を持たずに話しかけてほしい、私たちはちゃんとやります。」

◆立教大学オンライン講義　12/13　立教大学コミュニティ福祉学部のオンライン出張授業を行いました。

担当の小長井教授の授業では日本における安全・安心な多文化共生社会の形成にむけて、学生たちが欧州の移民政策や日本での移民の社会統合の問題点などを学んでいます。AMU ではそれらの中からふたつ、日本語教育と特別永住者（在日コリアン）について当事者から経験をもとにお話させていただきました。

安藤会長が海外での補習校指導経験、上田市の外国籍の子どもへの日本語教育について現状と課題、金さんは、在日コリアンという自らのアイデンティティとそれゆえに生じる不条理、それらを越える可能性について語りました。金さんはふたつの国家の間で翻弄された経験を「枠を超えて生きる」とプラスに結びました。

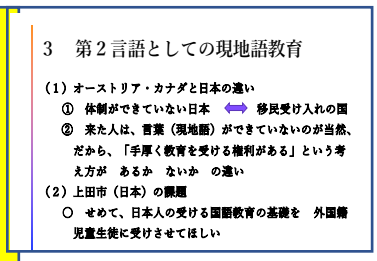
学生たちによると、お二人の話から、同じ社会で暮らしているにもかかわらず、「見えなかった」事実に向き合うきっかけになった、そこから新たな認識につながるといった一方、多文化共生は国家、人権問題や政治などが複雑に絡み、実現は見通せるのかといった感想もありました。



ある在日コリアンのこれまでとこれからの話

～枠を越える～

Agenda
- 私の出自から見る「朝鮮籍」という記号
- 私のアイデンティティを育んだ「民族教育」について
- この先の生き方・あり方について



◆外国籍の子ども支援者懇談会　小島祥美氏　講義 R4　1/17　オンライン、パレオビル 5階会議室

東京外国語大学多言語多文化共生センター長　小島祥美先生の懇談会が 2年越しでようやく実現しました。講義は事前に AMU からお聞きしたいことをまとめ、その内容に答えて頂く形で和やかに進みました。

【学力】を木に例えると…

葉：知識、理解

幹：判断、思考

根：意欲、関心、態度

太陽：教師、指導者

■小島先生が担当された「ばら教室ＫＡＮＩ」（日本語教室）では、算数を一段階進めて学習することで、子供たちに自信をつけさせていました。当時の教室の様子が映し出され、教室の画面いっぱいに「算数大好き！」と元気いっぱいに話す子供たちの姿が印象的でした。

■母語の大切さについて、小島先生の研究によると、外国籍の子どもが日本語で作文を書いた場合と、日本語、母語を混ぜて自由に書いた場合を比較し、その表現力の豊かさや文章量について興味深い違いが出ています。どの子どもも母語の表現力の方が日本語のそれを上回っていたそうです。

【講義より】

講義の後半では小学生の息子さんが帰宅され、「**お帰り～！もうすぐ終わるよ♪**」微笑ましいシーンも。

「上田市に住む外国籍市民の実態調査報告書」

市内在住の定住・永住者500名に言語別アンケートを送付し回答を得られた 100名の結果をまとめた報告書です。コロナ禍のもと、約1年かけて調査・分析を行いました。

必要な方はご連絡ください

発行：上田市多文化共生推進協会（AMU）

【AMU　PLAZA】

〒386-0024　上田市大手2－4－4

Tel/Fax 0268-25-2631

E-mail:ueda_tabunka@po15.ueda.ne.jp